

序論)

皆さんにとって【主】なる神様とはどのようなお方でしょうか。

私にとって神様とは、不敬虔な者を義と認めてくださる神様、キリストによって罪人を赦すことを正しいこととされる神様。簡単にいえば罪人を赦すことを認めてくださる神様。それが私にとっての神様です。

そして、この神様についての理解は、私だけに限らず聖書が教えている神様の姿だと思います。新約聖書はもちろんのこと、旧約聖書では、神様のことを「主よ。あなたは、あわれみ深く、情け深い神。怒るのにおそく、恵みとまことに富んでおられます」というような賛美がいくつもあります。特に「あわれみ深い」という言い方は、神様を賛美するときの定番で、聖書は神様が罪人を赦すあわれみ深いお方であることを何度も語っています。

そうであるにもかかわらず、今日の箇所は「それでも御怒りは収まらず、なおも御手は伸ばされている」ということば、3回も繰り返し語られています。正確に言えば10章にも同じことばが続いているので4回、イスラエルに対する神様の怒りが続いていることが強調されています。

さて、イスラエルは何をしてこうまで燃え続ける神様の怒りを買ったのでしょうか。

今日は、怒るのに遅く、あわれみ深い神様が、怒り続ける3つの理由をみていきたいと思います。

1) 裁きを軽んじる

神様が、怒り続けておられる一つ目の理由は、イスラエルが神様の裁きを軽んじていたからです。9節、10節を読んでみましょう。

9:9 この民、エフライムとサマリアに住む者たちはみなそれを知り、高ぶり、思い上がって言う。

9:10 「れんがが落ちたから、切り石で建て直そう。いちじく桑の木が切り倒されたから、杉の木でこれに代えよう。」

エフライムというのは北イスラエル王国の代表的な民族で、サマリアは北イスラエル王国の首都です。つまり、北イスラエル王国の主だった人たちは、神様の前で高慢な事を言っていたのです。

何をいっていたかというと。「れんがが落ちたから、切り石で建て直そう。いちじく桑の木が切り倒されたから、杉の木でこれに代えよう。」ということばです。切り

石はレンガよりも優れた石材であり、杉の木も桑の木よりも優れた木材です。つまり、どうゆうことかという、エリヤをはじめ多くの預言者が、イスラエルの罪を指摘し、悔い改めなければ神様のさばきがあることを語ったのですが、それらの預言を聞いたイスラエルの人たちは、「仮にさばきがあつて何か被害があつたとしても、前よりもよい石材や木材によって、もっと素晴らしいものに立て直せばいい」というのでした。これは神様のさばきを軽んじている証拠です。神様が自分たちを滅ぼすことなんてできるはずがないと高ぶっているのです。

だから、神様はそんなイスラエルに対して裁きの預言をくだされます。それが
11-12 節

9:11 そこで【主】はレツィンに敵対する者たちをのし上がらせ、その敵たちをあおりたてる。

9:12 東からはアラムが、西からはペリシテ人が、その口いっぱいイスラエルを食らう。それでも御怒りは収まらず、なおも御手は伸ばされている

レツィンというのは先週も話しましたが、アラムの王様の名前です。そして、「レツィンに敵対する者たち」というのはアッシリアのことです。

北イスラエル王国は、アラムのレツィンと手を組みましたが、神様はアッシリアの力を強めてイスラエルを攻めさせ、イスラエルの同盟国であつたはずのアラムからも攻められるようにされ、さらにはペリシテ人からも攻撃される。と書いています。

もともとはアッシリアに対抗するためのアラムとの同盟であつたはずなのに、アッシリアには全く対抗することができず、同盟相手であるアラムにも裏切られて、さらには、周りの国々から徹底的に攻められる。これが神様の裁きでした。

これはイスラエルが徹底的に攻め滅ぼされる裁きであり、これ以上の裁きはないと思えるような状態ですが、【主】の御怒りはそれでも収まらなかつたのです。

2) 裁かれても悔い改めない

【主】がみ怒りを収めない 2 つ目の理由は、イスラエルの人たちは神様に裁かれてもなお、悔い改めず、【主】を求めようとしなかつたからです。13 節を一緒に読みましょう。

9:13 しかし、この民は自分を打つた方に帰らず、万軍の【主】を求めない。

神様がなぜ人を苦しめるのか、困難な状態に置いたままにされるのか。それは罪

ゆえに苦しんでいる人たちが悔い改め、【主】を求めるようになることを願っておられるからです。神様はそのためにイスラエルにムチを与え、悔い改めをかたる預言者を送り出しておられました。でも、彼らは悔い改めのメッセージに耳を傾けようとはしなかったのです。だから、神様は御怒りを燃やし続け、北イスラエルの人たちを切り捨てるという裁きをなさいました。

そして、最初に切られたのが指導者たちです。14-15節を読みましょう。

9:14 そこで【主】はイスラエルから、かしらも尾も、なつめ椰子の葉も葦も一日のうちに断ち切られる。

9:15 そのかしらとは長老や身分の高い者。その尾とは偽りを教える預言者。

イスラエルのかしらとは、長老や身分の高いものであり、イスラエルの尾とは「偽りを教える預言者」だと書かれています。

イスラエルの長老や、身分の高いものたちは、神様のさばきをうけてもなお、人々が神様のみこころを求めて従うようにとは導かず、自分たちの力だけでなんとかしようとしていました。

また、霊的指導者であるはずの預言者の中には、激しい怒りを燃やされている神様のみこころを語らず、人々が喜ぶことばを神様からの預言として語る偽預言者がいました。つまり、【主】がさばきをかたられているのに「裁かれないよ。大丈夫だよ」という預言者がいたということです。神様は真っ先にそのような指導者たちを切り捨てられたのです。

私は最初、神様は憐れみ深い神様だといいましたが、神様から群れを指導する立場を与えられたものは、耳障りのよい、人々が受け入れやすいことだけを語るのではなく、時には人々が聞きたくないことも語らなければいけないのです。

実際、初代教会時代にも人々が喜ぶようなことだけが教会で語られるようなことがあったようです。テモテへの手紙 第二 4章3節、4節にはこのようなみことばがあります。

4:3 というのは、人々が健全な教えに耐えられなくなり、耳に心地よい話を聞こうと、自分の好みにしたがって自分たちのために教師を寄せ集め、

4:4 真理から耳を背け、作り話にそれて行くような時代になるからです。

人は、真理ではなくって自分にとって都合のいいものを求めます。でも、真理をかたるべき神の民はそれではいけないのです。

教会は福音とともに悔い改めのメッセージを語らなければいけないし、神様から指導者としてたてられているもの。私のような牧師もそうですし、それぞれの家族

の長としてたてられているお父さん方も、耳に心地のよい話だけではなく、悔い改めのメッセージも語っていかねば行けないのです。

北イスラエルの指導者たちは、それができていないがために、神様の怒りは続いていたのです。

しかし、悪いのは指導者たちだけではありませんでした。なぜならば 16 節にはこのようにあるからです。

9:16 この民を導く者は迷わす者となり、彼らに導かれる者は惑わされる者となる。

迷わす者と、惑わされる者のどちらが悪いかというと、当然、迷わす者の方が悪いのですが、神様は惑わされる側にも、ちゃんと正しく判断して例え国の指導者が迷わす者であったとしても、惑わされないことを望んでおられました。

その証拠に、神様は、惑わされた側の人たちについても 17 節のように言われます。

9:17 それゆえ、主はその若い男たちを喜ばず、そのみなしごも、やもめも、あわれまない。皆が神を敬わず、悪を行い、すべての口が愚かなことを語っているからだ。それでも御怒りは収まらず、なおも御手は伸ばされている。

多くの人が誤解していることは、迷わす人がいる場合、悪いのは迷わす側であって、惑わされた側は何も悪くない。と思いきこんでいることです。

でも、神様は例え迷わす者がいたとしても、それに惑わされる者のことを喜ばず、むしろ、怒りを燃やされるのです。なぜならば、サタンに迷わされた者は、ただ失敗をしただけではなく、「神を敬わず、悪を行い、愚かなことを口にする」ようになるからです。

だから、例え指導者が間違っていたとしても、神の民に責任がなくなるわけではないのです。神様は、例え指導者が間違ったとしても、神の民である一人ひとりが、「正しい判断をし、神を敬い、善を行い、みことばを語ることを望んでおられるのです。

しかし、イスラエルの人たちは、偽りの指導者に迷わされて、【主】を敬わない者となってしまいました。だからこそ、【主】の御怒りは収まらなかったのです。

3) 互いにいたわりあわない

そして、【主】の怒りが収まらなかった 3 つ目の原因は、彼らが「互いにいたわり合う。」ということをしなかったからです。18-19 節を読んでみましょう。

9:18 まことに、悪は火のように燃えさかり、茨とおどろをなめ尽くし、林の茂みに燃えついて、煙となって巻き上がる。

9:19 万軍の【主】の激しい怒りによって地は焼かれ、民は火の餌食のようになり、だれも互いにいたわり合わない。

18節の表現は、アッシリアがイスラエルを攻め滅ぼすことを示しています。そして、このアッシリアによる攻撃は、【主】の激しい怒りの現れだったのです。その結果、イスラエルの人たちは「互いにいたわり合わない（19節）」ようになりました。このようにみると、「だったら神様の裁きが悪いのではないか。」という人もいるかもしれませんが、既にみてきたように神様がこのように怒られている理由は、イスラエルが【主】の前に高ぶり、さばきを受けてもなお、悔い改めようとしなかったからです。

神様との関係が壊れる時、人と人との関係も壊れるのです。

実際、神様の真理から離れたガラテヤの教会の人たちはどういう状態におちいついていたのでしょうか。ガラテヤ人への手紙5章15節を読んでみましょう。

5:15 気をつけなさい。互いに、かみつき合ったり、食い合ったりしているなら、互いの間で滅ぼされてしまいます。

ガラテヤの教会は、律法主義の偽教師に惑わされ、教会内で互いにかみつき合ったり、食い合ったりしている状態になっていました。神様との関係が壊れている状態の一つのしるしが、このように互いに愛し合うことができなくなり、むしろ、互いに攻撃しあうような関係になることなのです。

私達の状態はどうでしょうか。互いに愛し合っているのでしょうか？ それとも、互いにきりあったり、かみつき合ったり、食い合ったりしているのでしょうか。もし、互いに愛し合えない状態にいるのであれば、それは神様との健全な関係が壊れていないかを確認しなければいけません。

北イスラエル王国は、神様との関係が壊れてしまっていたため、同じ北イスラエル王国内で喰らい合い。同族であるユダ王国にも攻撃をしかけるようになりました。20-21節を読みます。

9:20 右にかぶりついても、なお飢え、左に食らいついても、満たされず、それぞれ自分の腕の肉を食らう。

9:21 マナセはエフライムを、エフライムはマナセを、そして彼らはともにユダを敵とする。それでも御怒りは収まらず、なおも御手は伸ばされている。

恐ろしいことですが、飢えのあまり自分の肉を食う。家族の肉を食うといったことは、北イスラエル王国の末期の時期に実際にあったそうです。

そして、マナセとエフライムというのは、どちらも北イスラエル王国を代表する民族です。どちらも北イスラエル人、しかし、同じ国の民であるはずなのに、お互いを敵とし、同胞であるはずの南ユダ王国の敵になっていきました。このような人間関係の破壊は、神様のさばきの一つでもあったのです。

私達の教会の人間関係、また、それぞれのご家族の人間関係は壊れていないでしょうか。愛し合えないのは、神様との関係が離れているしるしであり、【主】の裁きをうけているしるしの時があるのです。もし、愛し合う関係が壊れていると感じるのならば、自分の中に神様を軽んじているところがないかを吟味して悔い改め、神様との関係の回復をしましょう。

みなさんのデボーション生活、祈りの生活、賛美の生活、教会生活はちゃんとできているでしょうか。【主】は、みなさんがしっかりと神様との関係を回復することを望んでおられます。

それを軽んじるときに、【主】は怒りを燃やし続けられるのです。

【主】のあわれみ)

しかし、幸いなことに、このイスラエルのように罪を犯す私達のために、【主】イエスキリストは死なれました。今日もローマ人への手紙 8 章 36 節を最後に読んでおわりたいと思います。

8:36 こう書かれています。「あなたのために、私たちは休みなく殺され、屠られる羊と見なされています。」

神の民イスラエルが、【主】のまえに罪を犯しつづけたように、私達も【主】の前に時に高ぶり、【主】のこらしめをうけても悔い改めず、互いに愛し合うこともできなくなったりします。

でも、そんな私達のために【主】イエスキリストは贖いの子羊として、十字架の上で死なれたのです。

私達が神様から目をそらすたびに、【主】の十字架の贖いが私達のうえに注がれています。だから、私達は北イスラエル王国のように切り捨てられることなく、このように礼拝をすることができます。これは本当に大きな【主】のあわれみです。

だからこそ、このあわれみを受けている私達は、【主】の十字架の贖いのゆえに、自分たちの高ぶりをすて、まずは【主】のと密接な関係をもっていきましょう。

【主】は、私達が【主】を求めるようになることを望んでおられます。